

極微 ごくみ

日本のどこかに最近の流行歌は、歌詞が聞き取りにくい、というか、分からない。リズムとムードばかりで、歌詞はつけたしという感じである。内容が理解できないと仕方ないと思うのは、老人の繰り言だろうか。古い歌でも、いい歌は新しい歌手たちがカバーして歌っている。JRが「コマーシャルソングで「いい日旅立ち」をリバイバルさせた。起用された若い歌手も、なかなかの歌唱力である。「日本のどこかに、わたしを待ってる人がいる」なんて、JRもなかなか商売上手である。なにより、詞が分かるのはい。

第8号

2003年(平成15年)11月1日土曜日(毎月1日発行)1部50円(送料別)発行所/天台宗出版室〒520-0113 大津市坂本4-6-2天台宗務庁内電話 077-579-0022(代)Eメール/T-Press@tendai.or.jp

天台ジャーナル The Tendai Journal

新しい流れをつくりたい

一隅を照らす運動総本部長に就任した壬生照道師

最初に一隅を照らす運動総本部長への打診があったのが9月30日。それから悩みに悩んだ。決断をうながすために、西郊宗務総長自ら長野県下伊那郡の隣政寺に足を運び、就任を懇請した時に言った。「…本当に、私のような者でいいんですか?」



壬生 照道(みぶ・しよ うどう) 師 昭和14年1月22日長野県生まれ。大東文化大学(東京)卒業。長野県飯田市の私立飯田女子高等学校で教鞭をとる。昭和36年隣政寺住職。信越教区宗務副所長を経て、平成11年10月から今年9月まで同教区宗務所長などを歴任。

寺にいて、檀家だけを相手に生きてきたわけではない。天台宗の僧侶としては、型破りだとの自覚がある。

地元の飯田女子高校を、校長で定年退職退職したのが平成十年である。「そこで、ヒラ教諭を十年、学年主任を十年、教頭十年、副校長四年、校長四年、しめて三十八年の勤続」。同高校は、浄土真宗が運営する私立高校である。さぞ、やりにくかったと思うが「そんなことはない。元をただせば、みなお釈迦様。だいたい、狭いセクト主義を意識していたら、いい仕事はできない」。その主張の結果を、校長就任で裏付けた。

寺にいて、檀家だけを相手に生きてきたわけではない。天台宗の僧侶としては、型破りだとの自覚がある。地元の飯田女子高校を、校長で定年退職退職したのが平成十年である。「そこで、ヒラ教諭を十年、学年主任を十年、教頭十年、副校長四年、校長四年、しめて三十八年の勤続」。同高校は、浄土真宗が運営する私立高校である。さぞ、やりにくかったと思うが「そんなことはない。元をただせば、みなお釈迦様。だいたい、狭いセクト主義を意識していたら、いい仕事はできない」。その主張の結果を、校長就任で裏付けた。

「そのころの壬生先生は怖くて、話しかけれなかった」という証言がある。今も六十四歳にはとてもみえない眼光である。「怒る時は、ためらわない。計算もしない。ただ年を重ねるにつれて色々なものが見えるようにはなっていた。けれど、丸くはなっていない」。地方行政の長である宗務所長を四年務めた。一隅運動については「西郊宗務総長の意向を充分に聞いてから」と前置きしつつも「地方で見ても、マンネリ。信仰運動が社会運動か、という議論は承知しているが、どちらも会員の喜びとならなくては、意味がない。中央か地方かということよりも、私は新しい血を入れることが必要ではないかと感じている。僧侶だけにやる企画運営は、今の時代にそぐわないのではないか」。

「ヤンキー母校に帰る」というドキュメンタリー番組がテレビで放送され大反響を呼びました。このいわゆる「ヤンキー」とは、北星学園余市高等学校教諭の義家弘介さんのことです。十五年前、不良少年で親からも学校からも見捨てられた義家さんは、里親に引き取られ、高校中退者を募集していた北海道の北星学園余市高等学校に入学し、一人の先生と出会い立ち直ります。

彼は、卒業して、大学に進み司法試験の準備中に不慮の事故に見舞われ、生死の淵を彷徨よっていた時、ふと目覚めると、恩師の姿が見えまじた。それが、冒頭の言葉です。それまで「もう死にたい、殺してくれ」と思っていた彼は、初めて、生きたい、どんなに苦しくても生きたいと思うのです。そして、自分のことを「夢」だと言ってくれた人が歩いてきた教育という道に進むことを決めるのです。「一生懸命生きていることを、希望を見せてあげれば必ず前に進める。だから夢を与えるのは大人の仕事なのです」。母校に赴任して五年目になると義家さんは、生徒とまっすぐに向き合い続けています。

素晴らしい言葉たち Wonderful Words

目覚めたら安達先生がいたんですよ。幻覚かと思ったけど、あつたかいし、涙もポトポト落ちてくる。で、ギョッと手を握って「あなたは私の夢だから死なないで」って。ずーっと朝まで傍にいたんですよ。血を吐いたら全部拭いてくれてねえ、オシメも替えてくれて……。阿川佐和子のこの人に会いたい「義家弘介さん」週刊文春10月16日号

母校の大学から、より好条件で第二の人生を提示されていた。それを蹴つての就任である。決意をさせたのは、今年八月に急逝した茨城教区宗務所長の光栄純秀師との約束だった。天台宗の未来を話し合う同志だった光栄所長は、ことあるごとに言った。「機会があれば、僕は、壬生さんに一隅をやって欲しいな、あなたも適任だよ」。

「そのことがなかったら、おそらく受けていないと思う」。趣味は山歩きと、キノコ狩り。アウトドアライフの人である。「山道だって寝られるから、当座必要なものだけ車に積んでいけばいいだろう」と、大津市坂本の役員宿舎に十一月一日着任した。国語の教師だったからではないが方丈記を愛読する。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」。流れる水は同じではなく、つねに新しい水がながれている。改革に託された任期は二年である。



# あなたの中の仏に会いに

## 三岐教区で授戒会

### ～300人が菩薩に～



現代の日本人が抱えている大きなテーマは、自分とは何者であるのか、どのような日々を過ごすことが幸せであるのかという問いかけ、すなわち「自分探し」だという。

衣食足りて礼節を知るとい言葉がある。まだ、日本が貧しく手から口への生活で「満足のいくまで食べる」とが第一目標であった時代には、その言葉は切実に響いた。

## ごころの中にある仏性に気づく

それから六十年近くが過ぎて「暖衣飽食」の時代になっても、あるいはそうであるからこそいべきかも知れないが「礼節」は乱れ、自らの安心した居場所を探すことが切実な問題となっている。

「この豊かな日本で」とは、よく聞かれる言葉だ。

確かに、私たちの周りには、物質や情報が溢れかえり、絶えずその飢餓感に悩まされて

## 光の世界に

伝教大師最澄上人が、天台宗を開宗されて千二百年を迎える。

天台宗では、このときあたり宗祖大師への報恩と、未来への希望を込めて「檀信徒総授戒」を展開している。

「すべての人々は、悉く仏となる種(仏性)を有している」と釈尊は説かれた。

このことに気づき、本当の自分に巡り会い、み仏に守られた確かで豊かな生活を送るために「授戒」が展開されているのである。その真理に気づいて頂き、煩惱という俗欲に悩まされることなくみ仏とともに歩んで欲しいとの願いからである。

「あなたの中の仏に会いに」。このスローガンのもとに行われている授戒とは、仏様から戒という安心を授けられる儀式である。

いる。それを豊かというのだろうか。

「物質的には十分に恵まれており自由が横溢している」と識者はいう。だが、その繁栄からこぼれ落ちた人々もまた多い。失業者やホームレスの増大、また中高年の自殺や凶悪犯罪の増加と低年齢化など、豊かさの裏側には社会不安が暗雲のようにたれ込めている。

困気が充ちる。その中を一人ひとりが戒を授ける伝戒大和上(今回は毘沙門堂門跡・森川宏映門主)の前に進み、日頃の行いを懺悔し、おかみそりを受けて身を清浄にするのである。そして戒鉢と呼ばれる宝珠が頭上に掲げられ、宇宙に充ちた仏の力が、受者の身体中に入って内に眠る力を呼び起こす。そして私たちを護り、正しい道への導くのである。

十月十三日には、三岐教区・法真寺において教区の授戒会が行われ、約三百名が戒を授けられ菩薩として歩みはじめた。

今回の授戒には、まだ幼い子どもたちの姿もみられた。また授戒を受けた男性は「体の中が清々しく、心棒が通った感じ。今日の感激を忘れずに新しい人生を歩みたい」と語っていた。

最初に説戒師が「直接仏様から戒を授かることは、良い行いをしよう、悪いことはすまないと誓うこと」、「守るべき五戒について」等授戒の意味について説明する。



説戒師の説明に耳を傾ける受者

総本山延暦寺御用達  
清浄歓喜団 調進  
創業元和3年(1617年)

**永清庵**

〒本店/京都市東山区祇園石段下南  
605- 電話 / 075-561-2181(代) 番  
0074 FAX / 075-541-1034

最新刊  
**天台ウーマン**  
という生き方

おんなたちのスロー・ライフ  
横山和人 定価 一三〇〇円十税  
宗門人必読の書

「天台に生きる女性たち」十三人のオンリーワンの輝きをさらりと描き出して話題を呼んだ「比叡山時報」の好評連載が本になった。新しい天台時代の幕開けを予感させる一冊。

好評評判  
**葬式仏教は死なない**

青年僧が描くニュー・ブッディズムひろくや、井上流代、高橋卓志、藤田庄市、全日本仏教青年会  
定価 一八〇〇円十税

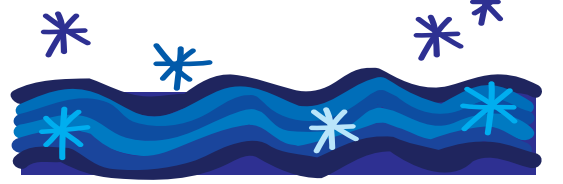
二〇〇三年京都で開かれた葬式仏教をめぐるシンポジウムで、ひろくやや氏らが繰り広げたトーク・バトルを再現し、青年僧の新たな活動を伝える。シンポジウムに際して初めて行われた青年僧へのアンケート調査の分析を初公表。貴重な資料として注目されている。

図書出版 白馬社  
〒612-8100  
京都市伏見区東本町一丁目  
電話 0775(611)7855  
FAX 0775(603)67525



## ハワイ開教奮戦記 (3)

# 事業団発足へ



荒了寛 (カットも筆者)

海外開教に乗り出すには、まず土地建物の取得、その維持と住職の生活費が要るということです。その膨大な資金の調達、支援については一宗あげて協力してもらう必要があり。しかし、当時宗内は比叡山大学の設立をめぐって推進派の西と反対派の東に分かれて対立しており、いわば反対派の急先鋒であった羽場大僧正がハワイ開教の必要を訴えても、西側の賛成を得ることは困難な情勢でした。

また、宗議会のような宗の

正式機関の審議にかけて事業を進めるといやり方は、このような新しい事業を効率よく進めるのは難しいという判断もあって、天台宗国際協会、或いは海外協会のような支援機関を設立して、独自にこの事業を推進しようということになりました。

勿論、羽場大僧正は、宗議会議長をされたほどの方でしたから、こうした構想ははじめからもっておられたと思われませんが、かなり厳しい宗内事情の中でハワイ開教の計画を進めなければならぬことは、私にもひしひしと感じられました。

しかし、寛永寺の杉谷義周大僧正、深大寺の谷堯昭大僧正、それに羽場慈温大僧正が名をつらねて一宗に呼びかけ

## 鬼手仏心

### 人はゴミではない

天台宗宗務総長

西郊 良光

またか、と思う。  
神奈川県で、小学校六年生の児童らがホームレスの男性を襲い、けがをさせたとして補導された事件だ。

少年らは「ストレス解消のためにやった。社会のゴミを退治する感覚だった」と話しているという。日本には、弱者のことを思いやる「惻隱の情」という言葉がある。誰が段ボールやブルーテントを家とし、猛暑や極寒の中を暮らしたいと思おうか。路上に暮らす人々には、それなりの苦しい事情がある。

そこに今の日本がおかれ

ている縮図がある、といっても、彼らの事情を推し量れといっても、それは小学生には無理かもしれない。しかし、それにしても人間をとらえて、ゴミ退治とはなんということか。

私たちはいのちあるものは人間はもちろん、草木にいたるまで「ほとけの子」として尊ぶことを学んできた。

このような事件が起きるたびに、家庭、教育、躰、色々なことが頭をよぎるが、心が震えて言葉もない。それはまた反面、仏教の教え、また宗祖の教えを敷衍すべ

き私たちの努力が足らぬ事実として、痛胸を刺す日本は、ここ数十年、追いつけ、追い越せを至上として進んできた結果、恥を知る文化を失ってしまった。その結果、自己の利益こそが最終目的になってしまい、いじめなどに端を発した精神の荒廃は、あつという間に私たちが日常生活で、身の危険を感じるまでに膨れあがってしまった。

人間は、本来、助け合っ

るわけですから、延暦寺、日光輪王寺をはじめ、大寺や有力者は殆どその趣旨に賛同することになり、実質的に一宗あげて協力体制が次第に整っていきました。

一方、私自身もハワイに渡つてからの生活などに不安はありましたが、化学会社の開発などを担当していた経験と人脈を生かして、資金を作る方法はないものかと、宗内とは別の分野からの支援策に取り組みました。

その頃、化学工業界は高分子化学万能といった時代で、次々に新種の合成樹脂が生まれていました。それらの樹脂を使って、新しい建材や機械部品などが作られていくので

すが、そういう樹脂や形成技術をつかって仏像のレプリカなどをつくと、実に見事な製品ができました。明珍氏はその技術で、国宝級の仏頭など、本物そっくりの複製品を販売してました。

この技術で宗内の国宝的な仏像などの複製品をつくれれば、開教師の生活費ぐらいはなんとかなるだろうと考えたわけです。

もう一つ、私が注目していたのは、共同印刷の開発室がアメリカから導入した印刷技術でした。この技術を使えば、布地のような柔らかいものにも精巧な印刷が可能で、マンドラなどを複製するには最適の方法でした。この技術を

## 密教展で資金集め

「ハワイ行き」を覚悟してからは、何かにつけて頻繁に羽場大僧正にお会いし、私はこういった計画やアイデアを逐一報告し、進め方を相談しておりました。

ある時、私は「こういう製品を専門的に扱う事業団のような組織をつくってはどうか」と提案しました。宗教団体ですから、寄付とか拠出金にたよるのは当然かもしれませんが、この場合、何かの収入になるような「事業」によって資金をつくることも必要と考えたからです。

「事業団」とは、その頃、原子力事業団とか、宇宙開発事業団といった名をよく新聞などで見ていたので、自然に口から出た言葉でしたが、羽

場大僧正は感心して、「事業団か、それはいい」ということで、仮称「天台宗海外協会」は「天台宗海外伝道事業団」でいこうということになりました。

事業団はじめてのプロジェクトとして企画したのが「天台密教展」でした。これは、例えば金剛界マンドラを大型のマルチスクリーンに成身界、三昧耶界、微細界など順々に、部分的に映したり、一部を拡大したりして、マンドラのしくみを映し、そのシステムと思想を考える「動くマンドラ」をつくり、これをマンドラ展の目玉に全国を巡回してはどうかと考えたわけです。どうしたらそういうスクリーンがつけられるか、ヒント

になったのは、近鉄奈良叡の展示館に備えてあるマルチスクリーンで、その「しかけ」を見るために何度も奈良に出かけました。電通の専門部門を訪ねて相談したりもしましたが、まだデジタル技術もない時代、マンドラを動かして見るといような技術はコスト的に不可能なので諦め、結局は従来の金剛界、胎藏界マンドラを中心に、それに詳しい図解を加えるということになりました。

この企画には共同通信の事業部の松田部長がのってくれたので、共同通信社、天台宗海外伝道事業団共催で、北は札幌から南は九州まで主要都市の百貨店を巡回する計画がたてられました。入場料と複

使つて製作したのが、京都・青蓮院の青不動図でした。



京都・青蓮院の青不動図 (部分)

製仏像、複製マンドラや仏画の販売でいくらかは事業団の収入になるはずでしたが、私はその実施前にハワイに渡つたので、その実際を見ることはできませんでした。

主催名義も、どういう経過であったか、事業団ではなく「一隅を照らす運動総本部」となりました。「一隅を照らす運動」として密教展が開かれたことは、それはそれで大きな意義があったと思えますが、このプロジェクトの原点は、どうかしてハワイ開教の資金をつくらうということ、今後の参考のために記憶しておいて頂きたいのです。

事業団は、別院が開創されてからは阪急交通社と提携し、ハワイ別院参拝団を送る事業を通じて、その名の通りその役割を大いに果たすことになりました。それに従って「事業団」という呼び名も宗内に広く定着するようになりました。

# なぜ宗教教育はできないのか？

天台宗総合研究センターが主催するシンポジウム「こころの教育を考える」が、十月七日に大正大学で開催された。このシンポジウムを計画したのは、センターの第二部会（村上圓竜主任研究員）。シンポは第一回目。コーディネーターをつとめた村上興匡研究員は「天台宗の機関で、なぜこのような研究をといえ、僧侶の多くが『宗教教育がなくなって、現今のような混乱が起きている』と感じているからだ」とし「どうしたら宗教教育が出来るかではなく、どうして宗教教育ができないかを考えた」と問題提起した。



## 柔らかい教育空間が必要（山口）

山口パネリストは「公立学校と宗教をめぐる教育法的課題」として「教育の現場は、多様な価値観が存在する。私学といえども、助成金等国家から独立していない。教育基本法で特定の宗教の教育は禁止されている。それならば、特定でない宗教は存在するのか」と語り「現在では宗教教育を行おうとすれば、国の助成金などに頼ることのない私塾のような形しかない」として、アメリカなどでの実例を紹介した。

更に「よく共生といわれるが、お互いの価値を尊重する教育が大事ではないか。フランスでは、イスラム教の生徒が、他の生徒がベールを被っていないから、はずすように学校から強制されるという例があるし、日本では、宗教的理由で剣道を否定した高校生が単位をもらえないという事件があった。価値の違いを尊重することが必要だ。柔らかい教育空間が日本に無いことが問題だろう。社会で見放された子どもたちがたくさんいる。逆に、宗教は今の子どもを抱える問題にどれだけ応えているかが問われている。マザーテレサのように、見放された人に手を差し出すことが、社会的理解につながってゆく」と教育現場での問題点を指摘した。

## いのちの教育

### （小川）

続いて小中学校の教頭・校長を歴任した小川パネリストは「学校管理者としての経験から人間が人間らしく生きるために変わってはいけない部分がある。そのことを教えなくてはならない。たとえば、大宇宙を大事にすること、生命を受けたことの感謝を忘れない。特に水は大事であるし、ゴミや汚染は人間の努力

によって減らすことが出来ることを実践させることも必要だ。中学校でカエルの解剖を指導したとき、私は、神仏のことは一切話さなかった。ただ、生命を奪うことについて皆さんの気のすむように、自分の信ずるところによって祈りなさいと言った。こころの教育というが、いのちの教育

## 社会の急激な変化と宗教（大谷）

更に大谷パネリストは「宗教的教材を扱った高校公民教育」として倫理を教えている立場から「若者たちの自分探しに宗教、学校、教師はどのように応えているかが問題」と語った。

倫理には、思想的文化的背景を抜きにしては語れないし、先端医療の発達で惹起された問題は、宗教の知識なくして理解できない」との見解を示した。

最後に村上コーディネーターは「この問題に対して、宗派としてのトレーニングが必要、宗全体で共有できるシステムづくりが急務である」とまとめた。

### お便りを下さい

あなたの周りでの出来事、ご感想をお送り下さい。また、取材について「こんな出来事、あんな人々」をお知らせ下さい。

封書、FAX、Eメールで、天台宗出版室まで。連絡先は、題字横です。

**FAXは、077-578-4814**



パネリスト  
山口 和孝 埼玉大学教育学部教授  
小川 雅康 元大府市立大府小学校校長  
大谷 いづみ 東京学芸大学教育学部付属高校大泉校舎教諭  
コーディネーター  
村上 興匡 東京大学大学院人文社会系研究科助手



左から大谷・小川・山口の各パネリストと村上コーディネーター

「オウム事件で、宗教は怖いというイメージが社会に固まった。かといって、既成宗教は悩める若者の受け口にはなっていない。社会の急激な変化と伝統宗教のかみあわなさがある」と指摘。若者の宗教的関心の分析不足や、宗教学習がなされていない現状を語った。特に「生と死をめぐる

とみれば道が見えるのではないか。つきつめれば、生命と環境のことであって、表裏一体である。スーパーで売っているものでなく、実際に鶏をつぶして鳥鍋にした子どもたちの感想は『かわいそうで涙がでた、ありがとうと思う』というものだった」と述べ、宗教教育という言葉こそ使わなかったが、会場からは「それこそ、宗教教育そのものだ」という感想が聞かれた。